

笑いの芸術・落語入門

伝統芸能コース

上方落語

目的

- 落語という伝統文化に触れ、身近なことを題材にした噺(はなし)を創作して、人前で発表するスキルを身につける。

効果

- 落語を創作・実演することにより、企画構成力や表現力が身につく。

到達点

- 観衆の前で発表することにより、情報伝達能力を磨き、良好な対人関係を築くのに役立てていく。
- 日本の伝統文化に対する理解を深め、国際社会で活躍できる教養を身につける。



講師 林家 染左
はやしや そめぞ

事前学習

上方落語についてプリントで予習の上、自己紹介文を用意しておく。

ワークショップの流れ (5日間×1コマ/日)

帯の結び方などを教わりながら着物(浴衣)を着る。
手拭いと扇子の説明

↓
本題の前に語る「枕」を創作して「落語」を体験

↓
講師の実演(「寿限無(じゅげむ)」「動物園」など)とポイント解説

↓
あいさつの所作、しゃべり方の基本、登場人物の振りなどの説明。台本を見ながら落語演習

↓
「枕」から通しでリハーサル。ネタとオチのポイントや重要性を確認

↓
観客の前で発表会(ビデオ収録)。反省と評価

事後学習

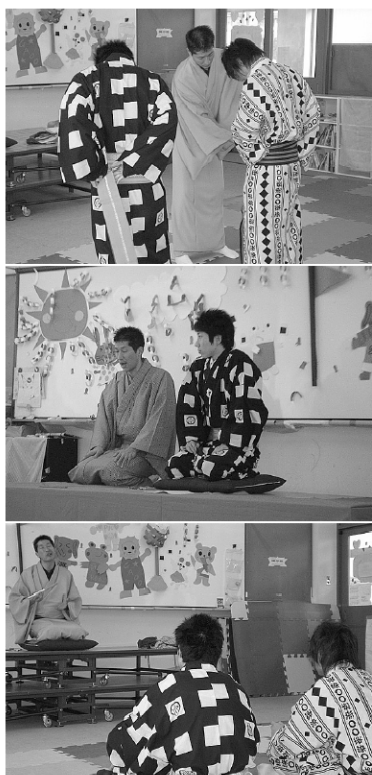
発表会のビデオを鑑賞しあう。

略歴

落語家
大阪大学文学部史学科(日本史専攻)卒業後、泉佐野市の学芸員となり、郷土資料館「歴史館いずみさの」開設準備にあたる。
1996年5月、落語への夢を捨てきれず、同市を退職し、四代目林家染丸に入門。学芸員として実地で学んだ古典の表現を、現代に活かそうと努力を続ける。落語はもとより、寄席囃子に不可欠な太鼓・笛の演奏もでき、日本舞踊の稽古にも励むなど、芸の幅を広げている。



- 受講生は、着物(浴衣)・帯・白足袋の着用が望ましい。
- 扇子・手拭い・座布団を準備する。
- ビデオに撮って、繰り返し稽古の復習をすると良い。



…ワークショップを実施して…

講師の感想

浴衣を着て、実際のマンツーマンの稽古に近い形で実施できたことは、生徒にとって良い経験になっただろう。生徒が落語を誤解することなく、真面目に受け入れたことは大変意義があり、コミュニケーションの取り方等を考える上で役立ったと思う。生徒が予想以上に準備を整えて発表に臨んでくれたため、立派に鑑賞にたえるものとなった。

先生の感想

通常の授業ではできない体験で、生徒たちは少々難しいと思えたことをやり遂げ、自信をつけたようだ。受講した生徒、発表会を観に来た生徒の認識は、「落語はお年寄りのもの」から「自分たちも楽しめるもの」に変わったようだ。その道のプロで「輝いている人」に出会えるのは生徒にとっても嬉しいことで、大変充実した時間になった。

生徒の感想

- ・言葉の「間」の重要性や、発声を学んだ。
- ・人前が出る恥ずかしさがなくなったように思える。趣味の幅が広がり良かったと思う。
- ・発表会を見て、同級生が本当に上手に落語を語っているのに驚くと同時に、楽しく笑えた。落語の見方が一気に変わった。

より発展的な ワークショップを 実施するために

- 間の取り方や相手の反応に合わせた話し方を、他の教科や分野にも応用・実践する。
- 身近な出来事をネタに新作落語をつくって発表する。
- 寄席囃子(よせばやし)などにも挑戦する。
- 実際の寄席に行つて落語を鑑賞する。